

子ども食堂に ついての調査

指導教員:教授 石津 孝治
担当学生:伊東 稲永 大島 大橋
尾花 川渕 黒崎

▶▶目的

地域の子育て支援とはどのようなものがあるのかグループで調べていく中で、子ども食堂が子育て支援の一環であることを知った。

そこで子ども食堂に調査にうかがい、その機能と課題について学びたいと考えた。

▶▶方法

- ①県内の子ども食堂を訪問し、スタッフの方と利用者の方にインタビューをした。
- ②インタビューした内容から子ども食堂の課題について考察し、解決策を考えた。



▶▶スタッフへのインタビュー

- ①子ども食堂を始めたきっかけ
- ②現在の利用者について
- ③経営状況について
- ④今後の課題について

▶▶結果

インタビューした内容を4つのテーマに分類し、それぞれ考察した。

その後課題を取り上げ解決策を考えた。

①子ども食堂をはじめたきっかけ

スタッフ代表の方が、ある母子家庭の深刻な貧困現状を知り、十分な食事をとっていない子どもたちに対し、自分にできることはないかと考え始めた。

● 考察

- ・ 県内でも貧困家庭が現実的に存在していることを知った。
- ・ 実際の現場ではそのような貧困家庭が利用している様子は見られなかったが、子育て家庭にとって今後も支えとなるサービスである。

②現在の利用者について

利用者数は毎回200人前後となっている。

（参加人数）

県内中から来店しているとのことだが
詳しい利用者情報は得られなかった。

● 考察

- ・ 子ども食堂を積極的に宣伝することで、このような支援を必要としている人が子ども食堂の存在を知ることができるのではないか。
- ・ しかし、利用者が増えると食材や調理、座席の確保などの問題から手が行き届かないのが現状。
- ・ そのため宣伝を行わない。

③経営状況について

参加費は子ども無料、大人300円

米は寄付してもらったものを使用しているがその他の食材はスーパーで購入。

県や市から支援金等が支給されているが、食材や光熱費等の経費でかなりの赤字。

そのため代表が自己負担で食材を調達している。

● 考察

- ・ 安値で利用できる反面、経営は赤字となっており、調達できるものは限られている。
- ・ 参加スタッフは全員無償ボランティアであるということに驚いた。
- ・ 代表の自己負担という問題点を解決する必要がある。

④今後の課題について

後継者となる人材がいない。

それに伴う経営者の負担の軽減。

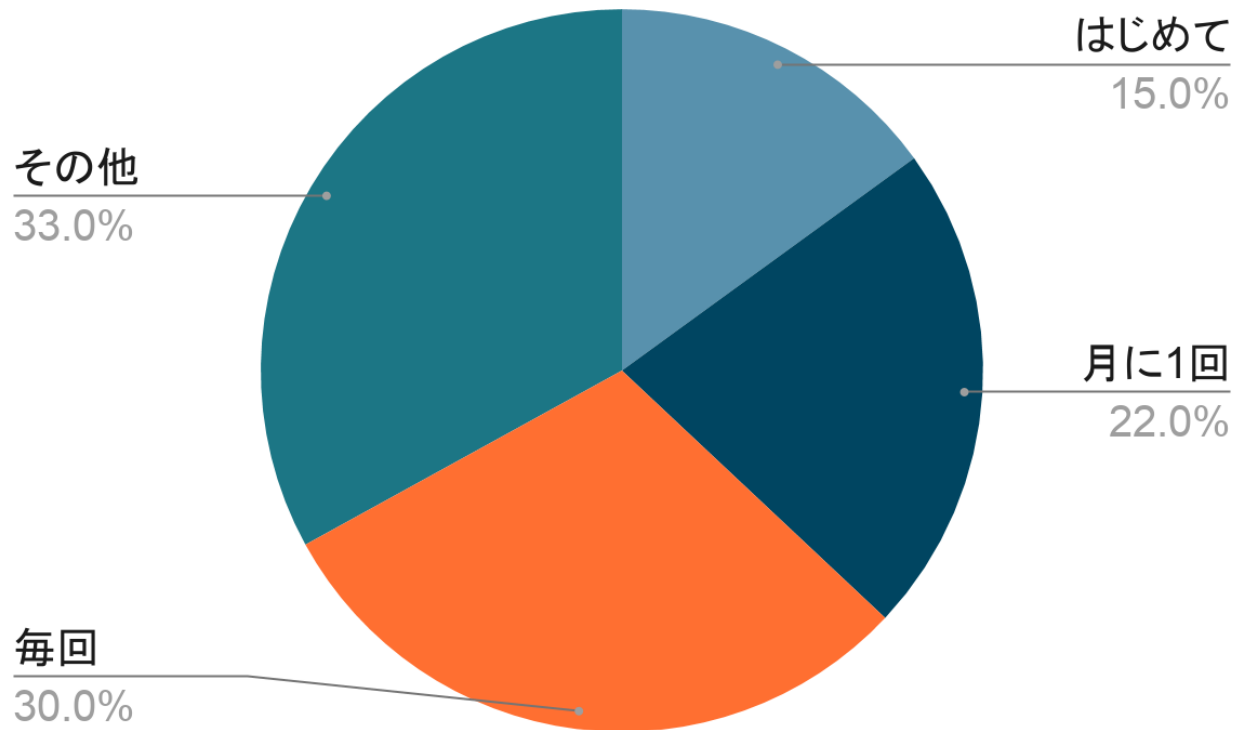
● 考察

- ・ 代表も高齢となり、今後続けていくためには後継者が必要。
- ・ しかし、ボランティア・自己負担での活動となると勧誘することができないのだろう。
- ・ スタッフへの支援も必要である。

▶▶利用者へのインタビュー

- ①利用回数、頻度
- ②利用した理由
- ③今後の希望メニュー
- ④また利用したいか

①利用回数、頻度



②利用した理由

「安い」「近い」「気軽に参加できる」等の意見が多かった。

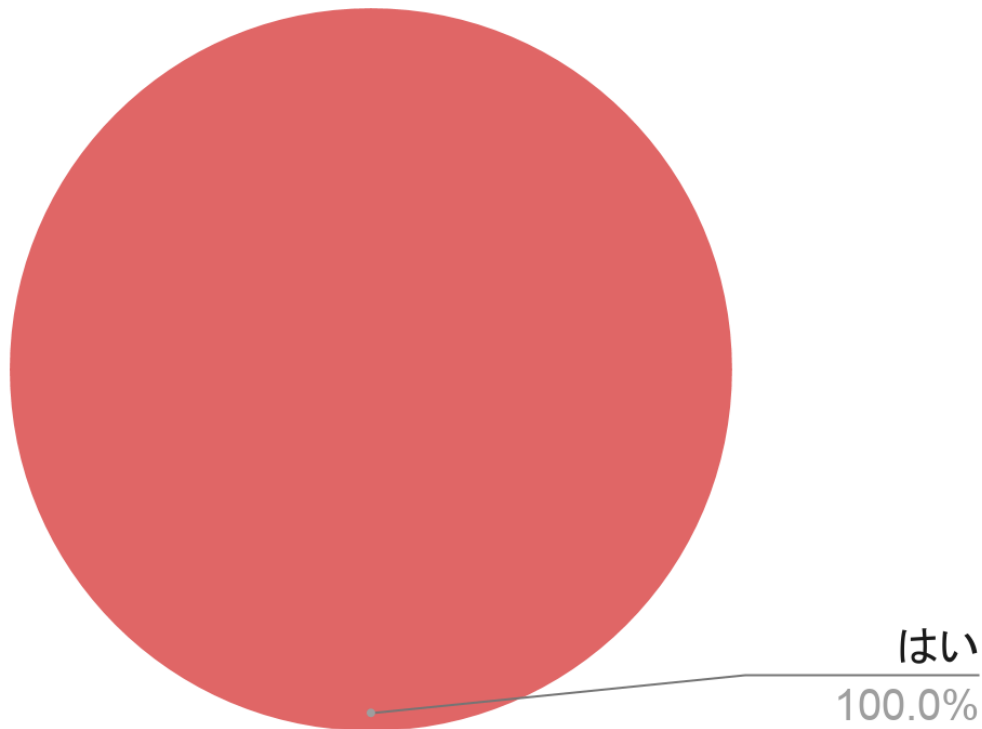
同じ館内に子育て支援センターがあり、利用した帰りに立ち寄ったという方もいた。

③今後の希望メニュー

ほとんどの利用者は「今のままで満足」と答えていた。

保護者の方からは「子どもが食べやすいもの」「子どもが好きなもの」との意見もあり、主にカレーやハンバーグを希望する方が多かった。

④また利用したいか



▶▶まとめ

～課題への解決策～

①後継者問題

②自己負担問題

③子育て支援としての子ども食堂

①後継者問題への解決策

現在の状況では、ボランティアでの活動には限りがあるため、継続や世代交代に問題が生じると分かった。

→NPO法人を設立して活動を行う。

法人化によって人材の雇用が可能となり、給与が発生する。

②自己負担問題への解決策

継続者問題と同様、機関からの援助が必要。

→県や市がメディアやSNS等を使って発信し、子ども食堂を広め、支援してくれる人・団体・組織に呼びかける。

募金活動で自己負担額を減らす。

③子育て支援としての子ども食堂

現状では、気になる家族や子どもを発見しても、専門機関等につなぐ手立てがない。

→児童相談所や自治体などと協議し、気になる家族がおられた場合の対応についてあらかじめ手続きを決めておく。

最後に

子ども食堂は、地域の憩いの場となっている。

子育て家庭や地域住民にとっても経営者にとっても継続していききたい活動である。